

福田雅之助氏没後50年 ～継承される庭球の心～

テニスミュージアム委員

藤岡 興平



「この一球は絶対無二の一球なり」

多くのテニス選手に影響を与えたこの言葉は、日本テニス界の父とも言われる福田雅之助氏が記した『庭球規』の一節です。福田氏が亡くなって、今年で50年になります。同氏はデビスカップに出場し、四大大会でも活躍した名選手としてだけでなく、選手としてあるべき姿を説き、日本テニスの発展に貢献した人物としても知られています。

福田氏が遺したメッセージをひもとくと、「テニスを通じてスポーツマンシップを発揮し、人間形成してほしい」という願いを感じ取ることができます。こうした福田氏のDNAを後世に伝えることは、日本テニス在今后も世界で評価されるために不可欠であり、テニスミュージアム委員会の使命の一つです。ここで福田氏の人生と数々の功績を振り返り、支援者の皆様と、今後のテニス界をリードする若い選手にお伝えできればと思います。

本記事は書籍や随筆、同氏を知る方々から伺った内容をもとにまとめました。温かくお読みいただけたら幸いです。

第1回全日本選手権優勝から世界へ

日本でテニスがプレーされるようになったのは、神奈川県横浜市に外国人居留者の専用クラブとコートができた1878年以降のことです。当時は硬球（レギュレーションボール）が高価であったため、軟球によるテニスが主流でした。

1897年に現在の新宿区西早稲田に生まれ、同地で育った福田氏はもともと野球少年でした。早稲田中学に進学後、本格的にテニスを始め、大学では軟式テニスの選手として名を馳せました。

日本で硬式テニスが普及したのは1920年頃で、慶應義塾大学庭球部や、早稲田大学庭球部出身の三神八四郎氏らが、軟式から硬式への転換を主張した数年後です。ほぼ同時期の大学卒業後に、福田氏は硬式テニスに力を入れ始めました。1922年に初めて全日本選手権が開催され、男子シングルスには63人が出場するなか、福田氏はシングルスで優勝します。その後、世界的に活躍をしていた熊谷一弥氏、清水善造氏や柏尾誠一郎氏と共に日本代表としてデビスカップ（1923、25年）に出場。パリ五輪、全英・全米・全豪大会など1925年シーズンまで世界で活躍しました。

イースタン・グリップへの挑戦

日本テニス草創期はストロークのグリップにおいてウエスタン（グリップ）が主流だった、と聞いて驚くテニス選手は少なくはないのではないでしょうか。

ウエスタンが主流だった背景には、前述のように軟式が先に普及したことがあります。軟式はウエスタンで、フォアハンドもバックハンドも同じ面で打つことが一般的だからです。そのため硬球が使われるようになってからも、ストロークはウエスタンで打つことに日本のテニス選手は何の疑いもありませんでした。熊谷氏や清水氏もウエスタンで戦っていましたし、福田氏もウエスタンで全日本を制し、世界に挑戦しました。

一方、世界のテニスはどんどん進化し、スピードと角度が重視されていきました。こうした中で、1923年にアメリカの世界的選手であったビル・チルデン氏と対戦したことが、福田氏のグリップを変えるきっかけとなりました。

チルデン氏のアメリカン・ツイスト・サービスは、福田氏のバックハンドに高く弾み、そのレシーブをウエスタンでドライブするのは至難の業、と痛感したのです。同時に、世界の選手を見渡すと、みな両面を使ってテニスをしていることに本当に驚いたといいます。こうしたプレースタイルに対応できる合理的なグリップはイースタン・グリップでしたが、このイースタンの創始者とも言われる人物こそチルデン氏でした。

自称理想家の福田氏は、その年のデビスカップ終了後に、欠陥を覚ったウエスタンを捨て、イースタンの採用に取り組みます。優れた技術を日本への土産として持ち帰ることが使命だと信じたからです。習得には想像以上の困難がありましたが、福

田氏の姿を見て、世界ランキング3位まで上り詰めた佐藤次郎氏はじめ、多くの選手がイースタンで活躍するようになっていきました。自分が得た知見を独占するのではなく、他の選手に惜しみなく与え、日本テニス界の発展に貢献したことが、福田氏が日本テニス界の父と呼ばれる所以なのです。

ただ、福田氏が解説する技術書には、イースタンを丁寧で紹介しつつも、「グリップは自分に適したものを採用し、位置・高さ・低さに最も合うように適用すべきである」と記されています。自身の経験・理論を押しつけることなく、選手の主体性を尊重する姿勢には懐の深さを感じます。

指導者としての温かさと厳しさ

福田氏は、1956年～73年に母校である早稲田大学庭球部監督、1959年にはデビスカップの監督を務めています。それ以前も長く、早稲田大学庭球部コーチを担った記録が残っています。福田氏は、部室の縁側やコートサイドでパイプの煙を燻らしながら、言葉少なに練習や試合をじっと見守っていたようです。コート北東側そばにある自宅には頻りに学生を招き入れていたものの、寡黙な性分だったため、同じくテニス選手だった富美子夫人が福田氏の意を汲み取り、優しく学生に語りかけることもあったようです。

試合に負けた選手には「悔しくて勝手に反省するだろう」と何も助言されない一方で、勝った選手には「有頂天になるな」と釘をさすことが多かったといいます。相談には親身に乗るものの、技術面や部活運営で、自分のやり方や考えを押しつけることはなく、学生の自主性に任せる姿勢だったそうです。

ただし、福田氏がコートに現れただけで、学生たちはピリッとした雰囲気になったそうです。練習内容のみならず、コート整備、個々人の生活態度まで目が行き届いており、福田氏に心の底まで見透かされているような気持ちになる学生もいました。

デビスカップ監督時は、宮城淳氏と柴田善久氏を相手に2か月間、徹底した厳しい練習を行ったことが記録されています。20分間の打ち合いではエラーを数え、課題とされたサービスとスマッシュでは毎日100球、累計5000本を打ち込み、サービスの確率は80%、スマッシュは90%を優に超える正確な技術を身につけた、と記されています。

テニス記者としても活躍

福田氏は1927年から東京日日新聞社（現：毎日新聞社）の嘱託社員として、テニスに関する記事を担当していました。それ以前の現役時代にも海外を転戦しながら空き時間を見つけては、世界中のテニス選手や試合内容について新聞社に事細かくレポートしていたことは驚きです。選手の体型、表情、各ショットの特徴、選手が置かれた状況や心の声などまで、読めば試合のダイジェストを頭で映像化できるほど細やかに記述されています。この記事は福田氏の愛称をとって『マアちゃん通信』として連載されました。

晩年には『図説テニス事典』、『日本テニス協会六十年誌』や『早稲田大学庭球部七十年誌』の編集を手掛けています。後世のテニス界や後輩のために尽力された熱意には敬服します。

スポーツマンシップを定めた『この一球』

テニスに対する溢れる情熱を比喩的に記した随筆を、福田氏は1949年、52歳のときに書いています。

「今のテニスは、私にパイプの味を味あわしてくれるほうが多い。パイプの味・パイプの存在を忘れさせてくれる、いいテニスが見られないのは淋しい。（中略）今のテニスの品質がぐっと落ちた」と厳しく批評していました。福田氏が頭の中で描く理想のテニスと現実が、かけ離れていたことを憂えていたようです。

テニス界の将来を思って福田氏が遺した言葉をまとめた代表作が、『この一球』（ベースボール・マガジン社）です。福田